

第 105 回公開シンポジウム

子どもの発達と家族や社会の関わり

◆ プレゼンター

服 部 祥 子

前頌栄短期大学学長／児童青年精神医学

◆ パネリスト

白 川 蓉 子

元甲南女子大学教授・神戸大学名誉教授／幼児教育学

◆ 司

会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 105 回「子ども学」講演会を始めます。今日は、お二人の素晴らしい先生においでいただきました。「子どもの発達と家族や社会の関わり」というテーマで、今日は講演会を始めます。

20 世紀までの多くの心理・精神医学研究は、子どもの発達について体系的な想定をもっていました。しかし、21 世紀の今、子どもを囲む家族や社会は大きく変容し、もはやかつてのパラダイムが通用しなくなりつつあります。そんな今、子どもの発達と家族や社会の関わりを大胆かつ未来志向的視点から考えてみたいと思います。

今日、基調講演としておいでいただいた先生は、服部祥子先生です。服部先生は、この 3 月まで、頌栄短期大学学長をされていた先生です。ご専門は、児童青年精神医学で、岡山大学医学部卒業後、大阪大学医学部精神科・神経科に入局、大阪府中央児童相談所判定課医師、大阪市内小児医療センター医長、大阪府立公衆衛生研究所児童精神衛生課長、大阪教育大学教育学部助教授、大阪府立看護大学看護学部教授、大阪人間科学大学人間科学部教授を経て、頌栄保育学院院長。それから、頌栄短期大学学長をされてきた先生です。ご著書もたくさんありますが、少しでも著書もお伝えします。『精神医学の子育て論』『子どもが育つみちすじ』『生涯人間発達論』『阪神・淡路大震災と子どもの心身 災害・トラウマ・ストレス』『人を育む人間関係論』等々です。そして、社会的な活動もたくさんされておりまして、文部科学省中央教育審議会専門員、厚生省社会保障審議会児童部会委員、大阪府教育社会教育委員、等々ご活躍を今でもされておられます。これが服部先生でございます。

それから、今日、パネリストに来ていただいた白川蓉子先生。白川先生は、本学の総合子ども学科の教授として、以前いらっしゃいました。白川先生は幼児教育学がご専門で、フレーベルのことについては、第一人者といえる先生であります。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学、徳島大学、神戸大学教授から甲南女子大学を経て、今、頌栄短期大学客員教授ということで、著書は『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究』『育ちあう乳幼児教育保育』と多数ご著書をお持ちの方です。

それでは早速、服部先生のほうから基調講演をお願いします。どうぞよろしくお願いいたします。

服部：ありがとうございます。服部でございます。大変細やかなご紹介を賜りましたが、私の本業は精神科の臨床医でございます。卒後、50年になります。ずっと子どもや若者の心の問題や病気に会おう仕事をしてまいりました。それから30年ほど、大学の教員もいたしました。二足の草鞋を履いてまいりまして、臨床とともに大学で児童精神医学、人間関係論、人間発達学等を教えさせていただいてきました。そして、私の個人的なヒストリーとしまして、夫の仕事の関係で海外に3回行くことがございました。通算8年間でございます。最初の外国は、1969年ですから間もなく50年になりますが、50年前のソ連という国、今はもうございせんロシアという国になりましたが、ソ連という国の首都モスクワで生活しました。当時二人の娘が2歳と0歳でございましたが、乳幼児期の2人を連れてモスクワに参りまして、ジェツキー・ヤースリ・サートというロシア人の保育園・幼稚園で3年間過ごしました。そして、日本に帰り3年後には、今度は、反対側のアメリカに参りました。当時、世界は東西両陣営で社会主義圏と自由主義圏に二分されていて、ソ連とアメリカはそれぞれのトップの国で、2度目の外国がアメリカでニューヨーク市の郊外に住みましたので両方の国の経験をしました。その時子どもたちは、小学生になっておりまして、アメリカのパブリックスクールに3年通いました。そして、その後1年ほど日本に帰りましたが翌年渡り鳥のように、再びソ連に行きました。その時子どもたちは中学生になっておりましたので、ロシア人の中学生生活を2年いたしました。以来、日本に帰って参りまして日本に定住しております。小さな子どもを連れて外国に行って生活をするということは、その国がよく見えます。特に教育機関、また、子どもを育てる親御さんたちに出会いますので、社会や教育の切り口としてはとても見えやすい。たとえば子どもをどう考え、どのように育てようとしているのか、また、学校教育や社会がそれにどう関わっているのかということを眺めることができたのは、私にとってとてもインパクトの強い刺激的な経験でございました。そして、外国の街角から日本を眺めるという、これもなかなか新鮮な体験でございました。今日の話の中にも、アメリカ時代やソ連時代のことが少し入ってくるかもわかりません。まず、こんな経歴の人間でございますが、今日は前のほうに座っていらっしゃる素敵なお皆さん、将来は保育園の保育士さんや幼稚園・小学校の先生になろうという志をお持ちでいらっしゃる学生さん、そしてまた、その道の大先輩で現実に仕事をしていらっしゃる専門家の方々、また子ども期に特別な興味をお持ちくださっている方々もお集りの「子ども学」講演会という大変質の高い上質の講演会に私をお招きいただきまして、本当にうれしく光栄に存じます。ありがとうございます。一色先生の司会で、敬愛する白川先生が側にいてくださることも、とても心強く、うれしく思っております。豊かな時間を共有できますことを祈って、始めさせていただきたいと思います。

今日の話は、大きく分けて二つです。お手元のレジュメをご覧ください。

まず社会と家族は今どんな変化に直面しているかということです。社会も家族も変わって参りましたので、まず、変化は何なのだろうかということで、前半に述べさせていただきます。そして後半で、変

化してきた社会や家族の中で子どもは育っているわけですから、今、子どもの発達をどう進めたらよいのかということをご一緒に考えられればと思います。この二つのテーマでお話をさせていただきたいと思います。

まず、「子ども期消滅の兆しのある社会」、今日はまずここから口火を切りたいと思います。皆さん方、ことに学生の皆さん方は多分 1990 年代のあたりで産声を上げられましたか？ 多分、そうですね。私の孫 2 人がちょうど大学生ですので、大体分かります。いつお生まれになられたか。そして、皆さんが今、向き合ってくださっている私は、ちょうど皆さんのおばあさんと同じ位の世代の人間だと思います。これは相当のジェネレーションギャップがあると、ちょっとおびえておりますが、私のような古い人間が話をしますので、皆さん方の心に届く言葉が使えたらいいなと思っております。さて皆さんがお生まれになられた 1990 年代というのは、ちょうど 20 世紀の幕が閉じる直前ですね。そして、物心ついてからは、21 世紀で子育てになっていらっしゃる。実は 20 世紀というのは、なかなか面白い世紀でした。2 つの大きな世界的な戦争がございました。第一次、二次世界大戦。しかし、その後の 20 世紀というのは、自然科学とその科学がもたらした恐るべきさまざまな知識や技術が、人間の生活を、かつて夢見た快適で便利で効率の良い生活環境を生み出す世紀となりました。どんどんどんどん発展していきました。私は 1940 年生まれですので、60 年間たっぷり 20 世紀を生きた 20 世紀的人間です。20 世紀が終わって 21 世紀が始まり、1 年が昔の 100 年位のスピードという言い方がある位すごいスピードで、変化が激しく進んでいく中で皆さんは今、過ごしていらっしゃるわけです。さて 20 世紀には 20 世紀の「パラダイム」がありました。パラダイムというのはその時代に共通する思考の枠組みのようなものをいいます。20 世紀には、「子どもというのは大人とは違う」とか、「子どもは成長して大人にならねばならない」とか、「子どもの成長には、大人に責任がある」とか、誰も疑わなかったのです。これが、パラダイムといわれるものだったんですね。ところが、それが変わっていきつつあるという予感のようなものを、最初に私に鋭く語りかけてくれたのが、1982 年にアメリカで出版された『The Disappearance of Childhood』（Neil Postman 著）という本です。「子ども期が消える」「消滅する」というセンセーショナルな本でした。著者はポストマンという人です。アメリカの友人が送ってくれ、翻訳をしようかなと思っているうちにちゃんと日本語の翻訳本が出版されました。上手な翻訳で、タイトルが『子どもはもういない』。もう、子どもはいないんだというタイトル、なかなかショッキングなタイトルです。アメリカでとてもよく読まれた本ですので日本でも私はよく紹介をしました。今から 30 年前です。その時にこの本が予言した世界が、21 世紀の今、当たり前になっているような気がするという所から話を始めさせてください。

ここでとても大切なことは、レジュメの「注」に書いたように Childhood（子ども期）という言葉は 6、7 歳～17、18 歳、この年齢を指します。ちょうど小学校・中学校・高等学校あたりでしょうか。この年齢を Childhood と言います。その前の、皆さんの多くが関われる乳幼児期、またぎりぎり小学校低学年の頃、これは別なんです。Childhood には入れません。子ども期の消滅といっても、この時間は消滅していないということをどこか認識に留めておいてください。子ども期消滅の兆しということですが私たちは 20 世紀の人間ですから、子ども期はたっぷりあったんです。大人と子どもは、厳然と違うと思っていました。子どもは、例えば、中学・高校生の制服は大事でした。私も入学して制服を買ってもらい

ましたが、大きいサイズを購入し、母親がスカートの丈を詰めました。必ず成長しますから。そして毎年毎年、丈をおろしていったそれでも卒業の時は、かなりつんつるてんに短くなっています。男の子なんかは、卒業の時は腕は袖からかなり出てしまう。制服というのが私たちの時代は、毎日の通学用以外の結婚式、お葬式、式典もすべてこれ一着で済んだんです。ちゃんとした洋服というのは、これしかなかったのです。また中学・高校生になりましてレストランや喫茶店、うどん屋さんでも友達同士で入ることは、ほとんどなかったです。親に連れて行ってもらうのが普通でした。校則がきつくて、本当にいろいろなことががんじがらめのようにされるというのが子ども期でした。その代わり、大人は子どもに非常によくしてくれました。ちょうど『サザエさん』の世界です。日曜日の夜、『サザエさん』というTV番組があります。その前の番組が『ちびまる子ちゃん』ですが、ご存知ですか？『サザエさん』の、カツオ君だとかワカメちゃんだとかタラちゃんとかの子どもたちと、お父さんとお母さんとサザエさんたち大人の姿、あれが日本のごく最近まで、私たちが育った昭和の前半あたりの姿です。子どもは、大人とは違う姿形、役割がありました。今でも子ども期というものに対して、法律上も特別な法律が設けられています。ご存知のように、学校教育法があって、義務教育をきっちり受けなくてはならない。あるいは、少年法では、犯罪は20歳までは少年と呼んで、大人の法律は適用しない、それから児童福祉法というのは、18歳までが児童で、子どもを守る福祉法というのは、厳然とあります。特定の種類の人間を子どもと法律で定め、現実にはこの法律は今もあります。

ところが今、これが現実的にはなくなっているのではないかと、いうことを30数年前に先程ご紹介した本の著者のポストマンが言ったんです。実は、この本の中でポストマンは書いているんですが、子どもは、18世紀になって初めて発見されたというのです。これは、歴史学者でフィリップ・アリエスという人が言った言葉です。子どもは18世紀になって初めて発見された。つまり古代や中世には子どもはいなかったんです。びっくりされる方いらっしゃるでしょ。ずーっと子どもはいたと思っておられる。もちろんその姿形は現実にはありました。ただ、子どもという概念が無かったのです。昔は、大人の服をちょっとちょん切って、袖を短くしたりして、大人服を子ども服にちょっと仕立て直す。食べ物でも、大人の食べ残しのお肉だとかスープだとかを飲む、それが6、7歳～17、18歳くらいまでの扱いでした。それから、産業革命が来ると12、3歳の子どもでも、例えば煙突清掃作業員になって仕事をする。チャールズ・ディケンズの世界なんかそうですね。そして、何かとても悪いことをしたら、大人の法律で裁かれ、子どもがワーワー泣きながら刑場に引きずられていく姿が見られた、こんな時代がずっと続いたのです。意外でしょ？つまり子どもというのは社会的産物なんです。初めから、いつの時代でも子ども期というのを認めたわけではなかったということを、この本で私も初めて知りました。たかだが、300年ほどなんですね、子ども期ができてから。なぜ、子ども期ができたかというと、この著者ポストマンによると、印刷技術だということです。グーテンベルクという人が印刷技術を発明しました。印刷するので、印刷物が社会に流布、広がります。それ以前の古代から中世にかけては、書物というのはごくごく数パーセントの人が関わる世界でした。識字率という、字が読める率ですが、とても低かった。一桁台のパーセントだったと思います、中世は。自分の名前が書けたら、立派なものでした。教会で名前を書いただけでも識字率、字を知っている率に入るという位、字はほとんど一般庶民には関係がなかった。ごく

一部の学者と教会の僧侶とか、そういうごく一部の人たちだけのものだったのです。ところが、グーテンベルクが印刷術を発明したために、印刷された字が、世界中に広がっていった。活字文化といわれる、字の文化が始まりました。そうすると庶民もみんな大人も子どもも字を覚えねばならなくなりました。特に子どもがこれを覚えるための学校が作られました。学校で覚える。そして、ここで覚えた知識や技能をもって大人になる。このパラダイムができたのは、わずか2、300年前のことです。その結果ははっきりとした子ども期ができたというのです。他にもいくつか理由があるかもしれませんが、ポストマンのこの学説というのは、なかなか説得力があります。この人は、メディアエコロジーの専門家で、ニューヨーク大学のメディア学の教授でしたから、メディアということから考えて、「子ども」の概念が生まれた元は活字文化で、その活字文化が学校というものを作り、そこに通って大人にならねばならない。そして、大人は子どもの教育の責任を負わなければならない。これが、パラダイムとして染み渡ったわけです。そしてこれを私たちは、誰も疑わなかったというわけです。

私はアメリカに、1975年～78年に居りましたので、アメリカの文化を見ていましたが、いろいろのことが日本よりも10年か20年ほど先を歩いていると思えました。1982年にポストマンがこの本を書く頃、アメリカではテレビがとても広がっていました。ビデオも多かったです。ぼつぼつパソコンやインターネットも出始める頃でしょう。その時期にポストマンが、このメディア、情報の伝達の仕方が、飛躍的に変わり始めたというのです。かつてはグーテンベルクによって子ども期が作られたけれど、もともと子ども期は社会的産物だから、再び、社会的に変われば消滅をするのではないかという予言をしたわけです。なぜなら、20世紀前半、1980年代ぐらいまでの情報伝達方法というのは、会話であったり文字を読むことがほとんどすべてでした。これは、子どもと大人を区別することができます。私もよく子ども時代に、大人たちが話しているところへ駆け込むとみんな急にピタッと話を止めて、子どもには内緒という顔をされたことがあります。きつと性の話とか、大人の恋愛の話だとかをしていたのでしょう。子どもには聞かせないよと、ヒソヒソ話をする。つまり、大人と子どもの文化を区別できた。子どもに与える情報と大人の情報が別でした。本でもそうです。大人が読む本と子どもが読む本というのは厳然と違っていましたから、子どもは大人の世界を知らぬままにのんびりと大人になるまでまず過ぐすというのが、時間帯として当たり前だったのです。ところが今、とくに21世紀になって、テレビ、ビデオに加うるにインターネットや携帯電話やスマホが日常生活に入りこみ、本当に情報が瞬時にして世界各地から同時に伝わる時代になりました。9.11がまさに象徴的で、リビングルームで、テレビのドラマを見ているように同時に事件が報道されました。21世紀の始まる最初の年でした。

現代のメディアというのは、大人と子どもを区別せず情報が伝達されます。平等でしょ。だから、どんな情報でも幼い子の眼底の網膜にも映ります。エロティックなもの、グロテスクなものから、残虐なテロの世界まで何回も何回も網膜の底に刻み込み、像を結んで見ることになるわけです。子どもだけそれを見ないというのは、難しいという時代です。だから、もはや大人と子どもの分け隔てができなくなる時代がくるという、30年前の予言は今ちょうどその通りだと思われる時が来たのです。それが、私が最初に「子ども期消滅の兆しがある社会」と申し上げたことです。現代社会のもっとも特徴ある社会的な現象として私は子ども期消滅と言いたいわけです。ただ何度も言いますが、覚えておいてくださ

いね。子ども期というのはあくまでも、乳幼児期以後の年齢層を言うということを。私が会った思春期の若者たち、50年前に登校拒否で学校に行かない子どもたち等が、私の前に来ましたが、本当に苦しみながらやってきたものです。当時学校に行けない子は、わずかでした。そしてその他にも心身症やいろんな悩みを抱えている子がやってきました。そんな子どもを私は「アンファン・テリブル」と勝手に呼んでいました。「我がアンファンテリブルよ」と。これはフランス語でちょっとおしゃれに言ってみたのですが、英語で言いますと「terrible infant (テリブルインファント)」となります。テリブルとは、“恐るべき”で、インファントは、“子ども”です。ジャン・コクトーという、20世紀のとても有名な鬼才と言われた芸術家がいきました。映画も作ったし、詩も書いた、絵も描いたとてもすごい人ですが、彼の作品に『アンファン・テリブル』という10代の若者を主人公にした小説があります。10代の小さい幼児ではないが、大人でもない思春期というこの時代にしかない特有の魅力あるは能力、文化、そんなものを彼は書きました。私は、その作品が好きで、アンファンテリブルという言葉をよく使います。早熟の天才、例えば、オードリー・ヘップバーン主演の『ティファニーで朝食を』という映画がありますが、その原作の作者、アメリカのトルーマン・カポーティーという小説家、大酒飲みのとんでもない男ですけれども、すごい早熟の天才で文学者でしたが、彼が登場した時も確かアンファンテリブルという呼称がささやかれたと覚えています。「恐るべき子どもよ」と。この恐るべきというのは、怖いというマイナスの意味ではなく、大人も心を奪われる、大人さへほっと相手への敬意と恐るべしという感覚を持っている。そんな意味です。

私の前にきた子どもたちは、本当に当時の登校拒否のはしりですから、自分は学校に行かれなくなったという中で、それはそれは悩んで、そして苦しんで、私の前に来るわけです。自分は人間失格じゃないだろうかと。あるいは心身症もありました、シンナーを吸う子もいました、暴走族も来ました。そういう非行も含めて、いろいろ問題をもつ10代の若者がやってきました。その頃診た若者たちは、行動の内容もいろいろで、非行などのマイナスのイメージが強かったかもしれませんが、でも、どこか共通していたのは、外からみるとまるっきり子どもっぽいです。丸刈りで大抵学生服を着てやってきました。そして大人のしめつけの中で、校則や何やかやがしっかりしているというような世界を生きながら。自分がどうしてもそれに乗れない、関われない、そんな苦しみを持ちながら、私の前に来ます。自分の心の中には言いたいことがある、私には私の考えがあると思っていますし、大人が自分たちをロボットのように扱うと言った子もいました。自分は人間なんだと叫びたいと言った子もいます。だけど、言語が下手だし、どう表現したらよいのかわからないので追い詰められた小動物のように、こっちをじっと見ている。何か言いたいという迫力がありました。これが、かつての私の会った診察室の少年たちです。「我がアンファンテリブルよ」と私が呼びたかった子どもたちです。ちょうど性に目覚めた思春期、自分が自分であるということに初めて遭遇して、初めて自分はいったい何者なのか、どうやってこれから生きていいのか、何を自分自身が感じているのだろう、本当に好きなことは何だろう、と問いかけねばならない時期。混乱はしていてもそういう内面の豊かさ、エネルギーがとっても濃厚な子どもたちが、私の診察場にはよく集まったものです。それが私は大好きでした。私は思春期の精神科医になったことが、自分の人生のもっとも幸せな選択だったと常に思います。あの危なさ、嵐のような危なさ、そして、

身をもむようにしながら自分を見つけようとしている若者たちを見ると、人間の本当の味わいを感じ、こうやって大人になるんだよというメッセージをあげたく思いました。

思春期の危機を私は決して、マイナスと思ったことはありません。ところが、時がどんどん過ぎて、ちょうど1980年代、90年代、たんだん時がこちらに近づくにつれて、子どもの雰囲気が変わってきました。なんとなく疲れていると言う子が多くなりました。そして、眼を見ると、死んだような眼をしているんです。生気が乏しくて、なんか疲れている。しんどいです、生きていて何かいいことあるんですか？大人になって何するんですか？ っつつぶやいたりします。ちょっとおしゃれな早熟な子は、夢は？ と私が聞くと夢？ と聞き返し、先生、夢なんてそんなもの、あるわけないでしょ、先生いくつになってそんなことを考えているんですか？ と反対に私が教えられたりする位です。何か大人世界を見知ってしまった悲しみや疲れ。テレビなどで、もう大人のいろんな恥部を見てしまった悲しみ、尊敬すべき学校の先生や政治家や弁護士とかお医者さんとか、いろんな人がいろんな醜い姿を見せてくれたりしますと、私たちが子どもの時に憧れた人物や職業というのがなくなっているのかもしれない。どうせ頑張っても何にもならない、とか、何のために先生、生きていますか？ 教えてくださいとか、いう子が出てきたりします。それが思っていることの全部じゃありません。思春期特有の照れもありますから。しかし心の奥の奥の奥に自分というものをしっかり持っている子どもは、口には出さないけれども、一番奥深いところで自分を持ち続けたいという想いがあるのを知っています。これは、後で言いますが、「生きる力の火種」というもので、この火種がある子は大丈夫です。そういうものを奥に持っているならば。でも、今この火種が危ない。持っていない子もいます。また火種そのものが小さくなっているの、外から見たら何となく「老いた子ども」に見える。「もうこんなに老いてしまったのか、あなたは」とか、「疲れてしまったのか」と言いたくなります。これが私の50年間の最初の方とだんだん変わってきた今のイメージのちがいです。つまり、子ども期がだんだんなくなることによって、私の前にやってくる子の姿も変わってきたということです。一方、大人を見ますと、思春期をしっかり悩んだのならともかく、なんとなくフワフワと、みんながやっているようにやってきた、そして、あなたの好きなようにしたらと親たちも言う。勉強さえていれば、特に何も言われなかった。そして自分について深刻な問いかけをしないまま大人になって、その結果なんと子どもっぽい大人がいることか。つまり子ども化した大人が増えました。犯罪においても、何でこんな子どもっぽい未自立で未熟で後先を考えず自分の人生を瞬時に失うような行動に走ってしまうのかという未熟さ、判断力・思考力の弱さ。これを私は「子ども化した大人」と言います。現代、子ども期がなくなることで、「大人化した子ども」と、内面の未熟な「子ども化した大人」が増えたというのが私の印象です。

さて、次が「家族」です。今日は「社会」と「家族」の二つを考えます。家族というのは私たちにとって最も重要な単位です。もともと家族というのは、血族という縦の親と子、これを血縁といいます。血のつながりのある者と、夫と妻、これは婚姻による姻縁ですが、それによる人々の集まりです。血縁と姻縁を中核にしながら家族ができるわけです。そして大家族、拡張家族というのは、親たちだけではない、その先代も先代もいます。また横につながり、結婚したら、それぞれの親族やいとこやら甥やらとたくさんになり、これが同じ屋根の下にいたら大家族、拡張家族となります。かつてはそうでし

た。私は4人姉妹ですが、当時は大体、兄弟3～4人、5～6人は当たり前でした。だから、大家族でした。これがちょうど高度経済成長期を中心にしまして、都会に若者、若い青壮年が集中しました。田舎から出てくる人が増えてきまして、親を離れて夫婦で家庭を作ります。あるいは、欧米のライフスタイルが入ってきて、夫婦単位中心の家族が増えました。そうしたいろんな影響で「核家族」が増えましたが、ほかの国もその傾向がありますが、ほかの国は、例えば欧米は長い時間をかけて核家族化していますが、日本の場合はすごく短い期間、わずか30～40年で一挙に核家族が増えていきました。それから「少子化」です。よく新聞に出る合計特殊出生率という難しい言葉ですが、一人の女性が生涯に産む子どもの数という算定の仕方がありまして、これが、1.3、1.2になったという記事を見られることがあるでしょう。この数字が2で、初めて人口が保たれます。1.2とか1.3というのは、人口が激減していくことをあらわし、これは欧米と比べても、最も低い数字の国の一つです。これが、少子化です。それから、「小家族」。家族の数そのものが小さくなっています。これらの現象が構造上の変化として誰もが取り上げているものです。私も取り上げています。それともう一つ、家族の機能というのも変わりました。20世紀的なパラダイムでいうと、家族は仕事集団だったのです。みんな家庭で仕事をしていました。農業の場合、お父さんもお母さんも田畑に行って仕事をして夕方帰ってくる。家族の仕事をしている姿をよく見ました。商業の方は、お店があつて家族で働く。漁業の方は魚を捕りに行き家族はそれを支える。林業では、山の木や炭などの面倒見ながら家族で暮らす。お父さんお母さんは見事に働き手で、働く姿が見えていました。おじいちゃんおばあちゃんも仕事をします。お歳を少しずつ足していかれても家でじっとしてなくて、田畑の面倒みたり草抜きをしたり藁でむしろや草鞋を編んだりされています。私も草鞋を藁で編むのが、上手なんですよ。おばあちゃんに教わったため、子どもの時からちゃんと草鞋を編めます。また毎日毎日暇をみつけて機織りをされるおばあちゃんもおられたり、みんな働いていました。子どもも働いていました。私は岡山の山奥の田舎で育ちましたけれど、毎日水を汲む。台所の水がめに外から水を汲んで持ってくる。つるべで汲み上げた水をバケツに入れて持っていくのが日課でした。あるいは庭を掃除するとか、私は鶏を飼っていましたので、鳥屋の中に自分で作った餌、お魚を練ったりした餌を持って行って、鶏にあげる。そして卵をとってきて母の所へ持って行くのが私の役割でした。こんな風に皆ちゃんと仕事がありました。仕事集団だったのです。

ところがその仕事の一つ一つが家庭内から消えました。親は外に働きに行つてほとんど働く姿を見ることがなくなりました。みなさんも見ていないのではないのでしょうか。あるいは、おじいちゃんおばあちゃんがご一緒でないから、ほとんど働く姿を見ることがない。子どもは子どもで、勉強さえしていればいいと言われる。お手伝い、私と白川先生はお手伝いと言うより、昔は仕事だったよねと話をしていたのですけど、子どもがお手伝いをする事さえ今は少なくなってきました。お勉強している子、塾に通っている子というのが当たり前になり、家で仕事というのを子どももしなくなつた。お母さんももちろん家事は大変ですけども、ずいぶん電化されて、昔の手間暇かかる生活や家事労働が少なくなりました。その分だけ外に活動の場を広げています。良い悪いではありません。それぞれが外の世界に出て行き家庭は仕事集団ではなくなりました。じゃあ、家庭は？ 家庭の働きは何？ と問いかけられると、私は、「感情の器」という気がします。結局家庭というのは、家族が、夜だけかもしれませんが外から帰って

くる。みんなどんな人も辛いこともあれば、また楽しいこともあれば、腹の立つこともあり、誰かに言いたい、誰かに慰められたい。そういう感情というものを一番出すのが、家族かなと思うのです。ところが器が小さい、核家族で少子化で家族の数も少なく器も小さい。そんなに大きくない器に上手に入ればいいのですが、誰かが何か問題を起こすとどうなるか。子どもは学校に行かなくて不登校で、学校の先生に叱られて、帰ってきて、これは大問題だとなる。お父さんも仕事がうまくいかなくてリストラに遭うかもしれない。これも大問題ですよ。お母さんは、PTAの友達やご近所の方とちょっとうまくいかない、といった悩みを持ったりする。なんかそういう感情が家族という器にそういうものが入ってくる。家族は感情だけで向き合いますから、なかなかこれは危なくなります。かつては、和やかな家庭だったかもしれないのに、私たちの前に来ると、どうしてこんなにゆとりのないギスギスした感じの家族かと思ったりすることがありましたが、それは逆で、そういう問題が起こったから家族がゆったりしなくなったのです。かつては、何かあったらすつと立って、ちょっと仕事をしてくると言って庭に行ったり、田んぼに行ったりと仕事に身を寄せることができたが、今は家庭は感情の入れ物です。みんなそれぞれ自己を突出させ、自分の主張をする。家族の構造そのものが小さい上に機能が感情に集中する集団というのは、結構難しいのです。風通しが悪いと感情がぶつかり合い難しくなるといいうわけです。このように家族の単位そのものが構造上も機能上も現在危うくなる方に変わってきたというのが、私の分析です。

では変化する社会や家族の中で子どもの発達をどう進めるか。私は、2つのことを提言したい。まず社会についてです。消滅する子ども期という社会の中で、では、私たちは今何ができるのか。いくら過去を懐かしんでも、過去に戻るわけにはいきません。現実がちゃんとあるわけです。この2016年のこの今、この今の中で子どもの発達をどう進めていけばよいのか。私はまず社会としては、子ども期が消滅するとしても乳幼児期があるでしょうと、これなんです。私は乳幼児期がどれだけ大切か、ずいぶん前から言ってきましたが、その意味は今までを遥かに超えた重さをもってきました。今や乳幼児期は、最後に残された聖域なんです。貴重な時間帯なんです。小学校にあがるとたちまちにして、子どもは大人社会に身をさらします。誰でもスマホでつながりますし、いろんな外とのつながりがあって、実際に人と会うこともなくてもつながれます。よくバーチャルリアリティと言われますが幻想のリアリティなのですね。本当の接触は実際はないのに、誰かとコミュニケーションしたような気がする。顔も見えないし表情も知らない、話したら唾が飛んできたというような生の経験もしていない、押しくらまんじゅうで身体を接したらどんな感じがしたか経験もしないのに、人と会ったような感じがする。文字が飛び交うだけで、コミュニケーションしたような気になる。こういうバーチャルリアリティとよく言われる時代が来たのです。保育士や幼稚園の先生になられる皆さん。どうぞ、覚えておいてください。人生、最初の6年、この6年を大事にしてください。そしてそのことを親たちにメッセージとしてあげてください。昔はのんびりできました。小学校時代も分子子ども時代でしたから。思春期になってもまだ子ども扱いされて、まだ大人ではないよと言われた。時間をかけて子どもから大人になれました。ですが、このパラダイムは壊れました。だったら、乳幼児期です。今、以前よりもはるかに重みが増しているのがこの時期です。私は何が言いたいかというと、ここに書きましたように体験、直接体験というキーワードと、それから、多様

な人間関係、人とのふれあい、この2つをこの6年間にどれだけ豊かに体と心に刻み込むか、これが一生の土台になるということです。木で言えば根っこです。根をはる時間は、わずか6年しかないと思ってください。その時に直接体験することです。experienceという英語は、経験と訳されますが、日本語は体験という言葉をも一つもっています。体験と経験。経験は2種類とよく言われています。直接経験と間接経験です。そして直接経験を体験というのです。皆さんがそれぞれ持っていらっしゃる自分の体と心、これは外の世界と自分を隔てる自我境界という中に自分がいるわけです。このシルエットの中に私がいるわけです。この中にいるのは私一人だけです。誰も入れない。自己の内界です。一步外は外界、他人の世界。自と他の世界。この世にはこの2つしかありません。自と他が触れ合うこと、通り路を作るものを刺激といいます。刺激は外から内界に飛び込みます。自我境界を突き抜けて中に入るのです。どこからでも突き抜けられるわけではありません。通り道は、5つしかありません。これを五感覚といいます。五感と言われ、刺激を受け入れる場所というのは、まずは触覚で、体表面全体から受け入れるものです。この中には温度感覚も痛覚も入ります。痛い、冷たい、手がぴたっと皮膚に触れたなど体表面全体が受容器となって刺激を受け取るのを触覚といいます。あとの4つの感覚は、それぞれ受容器があります。耳は聴覚、眼は視覚、鼻は嗅覚、舌が味覚の受容器です。ここを通り抜けて、刺激が皆さんの体の中に飛び込んでくる。音が聞こえる。何かを見る、においがある。あるいは味がする。触ったらすべすべしたり、とげとげしているとかの感覚がある。こういう刺激が自我境界を突き抜けることを、体験といいます。直接経験といいます。突き抜けるのと突き抜けないのでは、全然違います。一步手前で触るのをやめたら、ぴたっと触ったのとは全く違います。私の経験ですが、アメリカでお豆腐を説明するのに困りました。豆腐というものがどういうものか聞かれて、白くて四角くってぺたぺたしていて、水気があってといくら説明してもわからない。面倒くさいので、本物を持って行ってポンと手に乗っけたらすぐわかりました。一瞬にしてわかりますね。これは、直接経験だからです。これが子ども期に大切なことです。

もちろん間接経験も大切です。間接経験というのは、人からもらったものです。アフリカに行ったことがなくてもアフリカのことに詳しくご存知ですよ。行ったことがなくても。人の経験をもらうわけです。いわば借り物です。江戸時代に行ったことはないけれど、江戸時代の書物を読めば江戸の風景が目に見えようですよ。これは、人間の特権なんです。多くの知識は間接経験なんです。動物は直接体験しかありません。私の家に犬がいましたが、自分の家の周りのことは全部知っていたでしょうが、ちょっと外れたところの犬が、例えばアフリカの犬が今何しているだろうなんて考えることもしなければ、絶対わからなかったと思います。人間の間接経験の豊かさというのは絶対大事です。ただし、乳幼児期に直接経験を多くしておくかどうか、直接体験をどれだけ持つか、これが大切です。これを持たないでバーチャルな世界に入ると危険です。直接体験は何故大切か、突き抜けて刺激が中に入ると自己の内界で必ず何か反応が起きますよね。ああ、いい匂いだとか、美しい声だとか、ああ、あれは青い鳥だとか、いろんなものを目や耳やから入ってきた刺激が自己の内界を目覚めさせる。そしてイメージ(表象)を目覚めさせる。感情を目覚めさせる。同じ声でもお父さん、今日は何かいつもと違うわ、怒っているのかしら? なんてわかりますよね。それは、お父さんの声を何度も何度も聞き続

けた体験量が、その判断の元になるわけです。その判断もその個人特有のものです。ほかの人がみんなきれいといっても、自分はきれいと思わないことがあります。これが真実の反応なのです。本当の自分なんです。この直接体験を本当に大事にしてください。この人生早期の6年間は、先生やお母さんが、子どもの支配者です。良い意味で。一日をどう過ごすか、朝、日が昇って24時間過ごすわけですが、その間何をするか、何を見て何を聞いて、何を味わって何を嗅いで何に触れるか。これは、親や先生が決められます。子どもは、ある意味で親が決めてくれたスケジュール、メニューで生きているわけです。朝から晩までテレビ漬けにしたり、あるいは、0歳からスマホを見せたりしている親がいます。一方、お母さんに抱かれて、お母さんの匂いを嗅いで、お母さんの体温を感じて、眼差しを見て気持ちのいい愛撫を受けて過ごす親子もいます。これが一日24時間あるのです。子どもは一瞬一瞬世界を感じ取って生きている。これを考えるときに、子ども期は本当に直接体験を増やすことが大切というメッセージを親にあげていただきたい。

それから、もう一つは人間関係の大切さです。子ども期に、家族は少ないけれども、まず家族がもつ軸をしっかり立てること。つながりの深い縁深きつながりを持つこと。そして、やがてドアを開けて外の世界に出て行く。保育所ならば、0歳、1歳から行くでしょうし、幼稚園なら3歳から行くでしょうが、外の世界に出て行く。そこで出会う同じ年齢や年上の人にあたり、年下の子にあたり、あるいはお友達のお父さんやお母さんに会う。こうした人間関係が大切です。うれしいなと思うときもある、気が合うなと思うときもある、でも何かしら気が合わないとか、何かしらこの人とはやりあっちゃいけないぞとか、この人には負けるなとかの感覚、これらの人間関係の体験を、楽しい体験もつらい体験も含めて人間と人間が触れ合うこと。乳幼児期には直接体験と人間関係を豊かにもつことという2点。親御さんや先生方や保育士さんが心していただきたいことです。これが、子ども期消滅という社会で子どもを健やかに発達させるための橋頭堡です。ぎりぎりのところでこれを守っていただきたい。私はこれを提言したいと思います。

それから、家族について。いわゆる伝統的な家族という単位がもはや無いといってもいいかもしれない。核家族も、離婚された場合は、両親もいない。ひとり親と子どもの二人かもしれない。離婚の善し悪しを言っているのではありません。現象として家族の数がこんなに小さいと、単位としての家族が危なくなります。やはり家族というものを考えなくてはなりません。しかも子どもは家族の中でしか育ちません。行きずりの人の中では、決して育ちません。家族というのは、血縁であろうとなかろうと、その子の将来、未来を遥かに思いやり、そのための今を大切にすることをする人達のことを言います。目の前だけでいいと思う人、これを家族とは言いません。後はどうなってもいい、目の前にいる間だけ怒ったり叱ったりしてやらせ無理矢理良い子を作り、これが私の成果だと言うのは家族ではありません。この子が今やっていることが、小学校に行き思春期になり、大人になった時にどういう意味があるだろうかと、その子の生涯を思いやる眼差しを持って今子どもに最良と思うことを成す。これが、家族の条件だと思います。家族は一生涯切れませんよね。親が子を勘当しても、ずっと親と子です。親が死んでも親です。わが子をどんなに知らないかと親が言っても、わが子です。たとえ血縁でなくても家族というのは、そういうつながりを言います。そこで私は家族の心をもった人たちが、新しいファミリーネットワークを作るべ

きだと、私はこの頃強く主張しています。アメリカに住んでいた頃、アメリカは日本よりもはるかに核家族が多く、半分近くが離婚家庭でした。私が住んでいたラーチモントという所では、同じ学校のお母さん友達がたくさんいました。特に親しい4～5軒は、年中一緒に行動をすることが多く、誰かが映画に行くときは、一緒に行かない？ と誘ってくれて、自分の子どもたちとともに、何家族かの子どもを連れていく。私は美術館が好きで、美術館に行くから行く？ って、他の家族の子どもを何人も連れていく。それで、大いぞろぞろ6～7人の子どもが一緒に行くんです。3～4家族が一家族のように。うちの娘たちも、ヤンキースタジアムに寒い冬みんなが行くから行くと連れて行ってもらったり、私が絶対連れて行かないようなところ、例えば飛行機ショーに行ったりとかしました。これが新しい家族の形、ファミリーネットワークです。賢い親ならば、自分の家庭だけでわが子を育てるのではなく、あなたの子とも一緒に育てましょうという広やかさを持ちうる。これを新しいファミリーネットワークと言います。その家族の中で、何を育てなければならぬかということ、私のキーワードである「生きる力の火種」がその一つだと思います。一生涯、人は生きていく上に必要な自立力と共存力。この火種を灯すことです。これが幼少期から始まる家族の基本の第一です。生きるというのは、いろんな力が必要ですが、究極は、私は二つだと思います。まず「自立力」。これはたった一人で生きるということです。一人で生まれて一人で死ぬ。どんなに周りに優しい人たちがいてエールを送ってもらったり、支援してもらっても本人が最後の最後には自分で生きるしかないんです。一人なんです。さらに「共存力」も必要です。全く一人で自立して生きていられるかという、決して一人では生きられません。「人間」と書くように人は人の間。人と関わりがなければ、生きていけません。一人だけの大地を作って、自分だけの大空をもったり、電車や汽車やら道やら、そんなものを全部自分だけで作るわけにはいかない。みんなが一緒につながりをもって生きる。つまり関わりの中でしか生きられない共存力も必要です。だからよく私は、思春期の若者たち、たとえば人と会えない子たちに「申し訳ないけれど、人と共に生きるしかない。この世から引越することはできないのだから」とよく言います。引きこもっている子でも、窓を開けなさいと言います。いつも窓を開けてもらう所から始めるのです。窓を開けて空を見て、外を歩く人を見てごらんと。例えば寒い日はみんなオーバーコートの襟を立てている。自分も寒いと思う。それだけでも良いのです。あなたが、社会の一員だよ、同じ地球の下で、同じ空の下で今、この瞬間を人と共に生きている。これから始めたらいいんだよと言います。これを「共存力」と私はよびます。この「自立力」と「共存力」の2つが、私は「生きる力の火種」と考える。これを灯しておいていただきたいと思うのです。それで私のような思春期専門の者は、まずあなたはあなたよ、他ならぬあなたなのよ、そして人と共に生きていこうね。というメッセージを送ることができるというわけです。

それから、もう一つ。母性と父性という話をします。どんなファミリーでもいいです。もちろん生物学上の父と母という血縁、姻縁による昔の伝統的ファミリーでも、育親や里親さん、あるいは近くの子どもたちとしょっちゅう一緒に共同生活をするというファミリーもいてもいいのですが、その中でよく私は、母性的関わりと父性的関わり、その2つ、必ず両方がいりますよと言う話をします。これは、カール・ユングの学説です。母性的愛と父性的愛という言葉がありまして、母性的な愛というのは、「包む」愛です。包むのです。お母さんが体内で赤ちゃんを子宮で包んだという原風景がありますね。子どもがどんな子どもで

あれ、全部ひっくるめて、母は自分の体内に抱きとめたわけですから。そして生まれた子どもを腕に抱きしめて包みます。この足は気に入らないからとか、あなたの表情が嫌だとか、内の家風に合わないからと言って、気に入らない所を放り棄てるわけではない。必ず全部を包む無条件の愛。子どもは私は私であっていいという受け入れられ方をします。これを私は、母性的な愛と呼びたい。包む愛です。ところが、これだけでは人は生きられないのです。いつも包まれているわけにはいかない。このような厳しい世の中を生きていくためには別の愛も要る。これが父性的な愛「切る」愛なんです。切るわけですから。切るというのは何か。親である限り、自分の子どもであるならば、こういう子になってほしい、あるいは、これは正しい、これはいけないことをしているということを私の子どもなら、このことを覚えてほしい。罪を犯したら償ってほしい、謝ってほしい、というようなことを求めます。正と邪、善と悪、あるいは美と醜。世界はそういう明るいものと暗いものがあり、この2つを分け切って教えねばならない。それも愛をもって。この「切る」愛これを父性的愛と考えるというのがユング的発想なのです。父親というのは生物学上、初めから離れています。精子を送り込みますが、もともと離れています。お母さんだけが、子どもを10か月体内に包みます。父親は、初めから切れている。だけれども、子どもに深い愛を持つ。その愛を父性的な愛という。ある意味で条件付きの愛です。例えば死刑囚になるような大きな犯罪を犯しても、お母さんは、死ぬ日の朝まで我が子に一日でも長く生きてほしいという包む愛を注ぐ。しかし父親の愛は、これだけのことをなした、これに対して償いをしなさいそれでこそ、私の子どもだ、というメッセージを伝える。これを切る愛といいます。母がいつも母性、父がいつも父性とは限りません。これは男女を問わず、この2つの愛が健康な形で子どもの発達に関わる人たちが、子どもとのつながりの中で、豊かにもっていることを願っています。そして既定の家族観にとらわれず新しいファミリーネットワークの中で、新しい家族単位の中で、子どもが育ってほしいと願っています。早口で恐縮でございました。時間が少し出てしまったかもしれませんが、話を終えます。ありがとうございました。

一色：服部先生、大変素晴らしいご講演をいただきました。ありがとうございます。非常に私も目から鱗というような感じで、子ども期が消滅して、今度は、乳児期をしっかりとやらなきゃいけないというのが一つの重要なポイント。それから、家族。家族も新しいファミリーネットワークというようなもので、今までの家族とは違うんだというような、そのあたりが、今の時代では重要だと。それから、母性的と父性的、そこの所で違いがあって、その違いが両方上手く合うことによって、素晴らしい子どもが出てくるというようなお話でした。

服部：ありがとうございました。

一色：それでは、これに対して、白川先生のほうから、パネリストとして、別角度でお話ししていただければと思います。よろしく願いいたします。

白川：パネリストとして、私の専門は幼児教育学ですので、幼児教育のほうから、コメントさせ

ていただきます。服部先生と私は、同年代です。服部先生は、皆さんをお孫さんっておっしゃっていたので、今日は二人のおばあさんが、ちょっと遠い話をする事になったと思っていたのですが、実は現代にぴったりのお話でした。私と服部先生が出会ったのは、服部先生が頌栄の学長になられて一年目ですね？

服部：そうです。

白川：その時に、私はたまたま頌栄にコマ、専攻科を教えに行っていました、それで、授業が終わったら、もうすぐに服部先生の部屋に行きました。本当に学長さんでお忙しい時なのに、わーっとおしゃべりしたら、ものすごくお話しが合ったものですから、一時間位話込んで、お邪魔した存在です。何かというと、やはり同じ時代を生きてきて、そして、精神医学と幼児教育学で少し異なりますけれども、ニアミスをあちこちでして、共通の知り合いの先生もたくさんいらっしゃいました。そういうことで、本当に今日の話は大変私は面白かったです。ただ、私が一番知りたいのは、学生の皆さんが、どういう風に思われたのかなということです。子ども期消滅のことですけれども、ちょうど皆さんの世代というのは1996年生まれ位ですよね。本当にこのポストマンさんが1982年に予言したことは、まさに現実になりつつあって、本当に子ども期が消滅してしまっている時期に皆さんが、子ども期を過ごしているんです。何か実感がありますか？もし、実感があれば、皆さんにすすめてほしいのは、お母さん、それからおじいちゃんおばあちゃんがどんな子ども期を過ごしたかというのを、いろいろ聞いてみたらいいのではないかなと思います。そうすると今の服部先生のお話が、私たちの子ども期のことが本当にありありとわかると思います。

確かに、お話しの通り、大人社会と子ども社会の境界線がなくなっているという時代です。服部先生が紹介されたこの『子どもがいない』の本は、私もぜひ読んでみたいと思って、アマゾンで注文したら翌日にすぐに来ました。ロングセラーで1982年に書かれたのですが、翻訳されたのは、いつだったのでしょうか。

服部：その数年後ですね。

白川：そう数年後。そして、2002年頃にまた、改訂版もでています。表紙を比べたら、やはり違うのです。この本は、本当に面白いなと思いました。私は、フレーベル研究で頭がいっぱいで、フレーベルの遊びと仕事を通しての学び、フレーベルのキンダーガルテンがどういう幼児教育だったのか、という実践を検討しました。結局遊びと手仕事ですね。仕事をとおしての幼児教育だったわけです。ポストマンの本で最初に言っているのですが、子ども期は社会的に作られたものだということです。その契機としてグーテンベルクの活版印刷、これが大きかったんですね。これが何年位だったか、ご存知ですか？ フレーベルが幼稚園を開いたのが、1840年です。ブラ

ンケンブルクに、遊びと畑仕事したり、手仕事したりする幼稚園を作りました。その時、ブランケンブルク市で、幼稚園創設記念祝典を行ったのです。その時グーテンベルク活版印刷 400 年記念と副題がつけられていました。400 年記念と銘打ってブランケンブルク市をあげて、幼稚園の設立を祝ったのです。それをこの本で初めて知ったのですけれども、やはり活字、その読み書きを子どもが学ばなければならない、というところで、子ども期と大人期がはっきり区別されてきました。

グーテンベルクの活版印刷の発明は、400 年前、1440 年や 1445 年という説もあるし 1450 年という説もあります。この本に書いてあったのですが、グーテンベルクが活版印刷を発明したのは何年というふうには言えないんだそうです。というのは、それ以前にいろんな人が活版印刷をしていて、グーテンベルクは最終的に完成させた、そういう感じみたいです。だから 1440 年ってあったり 1445 年であったり、どこをもって活版印刷の発明というのか、どうも諸説があるみたいです。それで、キンダーガルテンは、1840 年ですから、フレーベルは 1440 年を活版印刷の発明の年としたのでしょうね。

これがまず、服部先生のお話しをお伺いして、私も大発見をしたことです。それと、私の授業でよく言ったのですが、幼稚園、幼児教育施設よりも先にできたのは、初等教育施設、小学校です。小学校はなぜ生まれたのだらうと、それが、疑問でした。そこで私は、授業では簡単に、やっぱり産業革命以降に一般庶民にも読み書きが必要になった。文字の読み書きが必要になって、それで小学校ができてきたというような説明をしていました。それ以前、ローマ時代にはもうかなり文字は複雑になってきていて、特定の専門的な人たちが文字を操っていた。ところが、それはどんどん消滅していった、今度は社会的な読書力というか、社会的読み書きというように、すべての人が読み書きをできるようにしなければいけない、という風になってきて、また文字が復活してきた。そういう流れみたいです。そこで、一般庶民の子どもたちにも読み書きが必要だと、そして、まず初等教育の学校、小学校ができてきたのです。それで、少し遅れて幼稚園、幼児教育施設ができてくるわけですが、実はその前にイギリスのインファントスクールでは、幼児にも文字を教え込む、そういうのをやっていました。「子ども期」に幼児もほうり込まれていたのです。それに対してフレーベルは、学校と違うんだ、小学校と違って、遊びと作業を通しての学びを幼児期の学びとしました。キンダーガルテンは、子どもの庭なんだとこういう風に言いました。やはり、お話にありましたように 18 世紀に子ども期が発見されたといいますけれども、ルソー、フレーベル、ペスタロッチという形で、子ども期の発見、大人と違う子ども期、その子ども期にふさわしい教育ということが唱えられたんだという点。この本と服部先生のお話で、つじつまが合って、非常に面白かったです。これが、第一点です。そして、消滅してしまった子ども期の真っ只中に子ども期を送ったとして、あんまり実感はないと思いますし、それがどういうものかというのも難しいでしょうけれども、それを学生の皆さんに聞いてみたい気がします。

あと、私は服部先生と尽きないお話を研究室で長時間させていただいたのですけれども、やはり、今日のようなお話の背景に、先生が思春期の子どもを対象にした相談をずっと重ねてこられている。いろんな子どもを見てこられているので、その中で、こういう理論が出てきているというところが、なんといいですか、非常に子どもと向き合いながら、その子どもと関わりながらそれに裏付けられた壮大な理

論だと思われます。その背景には、特に問題のある子どもたちとたくさん関わってきておられるからこそ、このような提言が出てこられるということを感じました。

それから、子ども期があった時代は、家族は子どもなりに参加する仕事集団だったのですね。

服部：どうでしょう？私は、そう思っているのですが。

白川：私も、それは分かるんですけども、学生の皆さんはどうですか？

服部：そうですね、おわかりにならないでしょうかね。

白川：お手伝い、よくしていらっしゃいましたか？

服部：私はよくしていました。でも今はお勉強ばかり、かな？

白川：お稽古事やって塾行って。

服部：それでいっぱいかもしれませんね。

白川：それで、学校に行って。そんな感じですよ。ですから、私の場合、どんなお仕事をしたかと言えば尽きなく服部先生と話が合っちゃうんです。おたがいに育った場所とかも違うのですけれども、でも似ているんですね。

服部：似ていますね。

白川：似た風景が、ぱっと思ひ浮かびます。そして、またフレーベルのキンダーガルテンなのですが、私の本では、「遊びと作業を通しての学び」という副題にしたのです。つまり、フレーベルの言うフレーベルの目指したキンダーガルテンでは、労働ではなくて仕事なのです。それで、畑仕事を子どもたちも職員も先生も一緒になって種を植え、耕していました。一人ひとりの子どもが、自分の畑を持っているのです。収穫もして。あれは、労働というより仕事なんです。また、フレーベルのキンダーガルテンでは、竹、小さな棒を組みたてるとか、紐を編むとかします。籠やむしろを作るのです。もともとはそれでした。それが、キンダーガルテンが変化してきて幼稚園になると、机の上の作業になってしまう。小ちゃな作業になりました。それでも、例えば紙テープを編んで花瓶の敷物にするとか、お家の人へのプレゼントにするとか。今でも幼稚園では、やっているところがあります。紙のお皿で壁飾りを作ったりしています。フレーベルが考えたのは、労働ではなくて、仕事だったんだなと思いました。ですから本当に私の考えている幼児教育学、幼

児教育にかなり共通したヒントを得られるなど、という感じがしています。

後半部分の服部先生が本当におっしゃりたかったのは幼少期、幼少期の重要性ですね。ふと不安に思うのですけれども、消滅した子ども期を過ごしてきて、保育士になって、子どもたちに、どれだけ子ども期の楽しさを教えられるか、これは難しいところではないかと思うのです。保育士さんになりたい、そして保育士になって、幼稚園の先生になって、例えば、虫に触れないとか、土に触れないとか、そういう人がいるとすれば、それは子ども期に子どもらしい遊びをしていなかったのかなと、考えられます。昔の子ども期とは違うんだと、その点を自覚するだけでも、その失われた子ども期を取り返すような、何かを考えて保育士さん幼稚園の先生になること、小学校の先生でもそうだと思うのですけれども、そういうのが課題かなと思いました。

子ども期と区別される0歳からせいぜい6歳くらいまでの直接経験の重要性というのを私もとても共感するところです。私、甲南女子大学にずっと車で家から通っていたのですが、今日、こちらに出るときに、どうやって行くんだっけと、電車で来たのですが、JRで来ればよかったのに、阪急に乘ってしまい、岡本駅で降りて、それでどうやって行くんだっけとわからなくなっていました。駅で少し時間があつたので、コーヒーを飲んでいました。そしたら、大学生らしき人が、もしかしたら甲南女子大の人かもしれないですけれども、数人集まっていろいろお話していて、たまたまパツと耳に挟んだだけですけれども、最近あった事件で、子どもが高層マンションから飛び降りて亡くなった事件、その話でした。親はそこに居ただけだけど、いつの間にかいなくなったと思ったら飛び降りて亡くなったという事件です。

服部：いくつ位の年齢でしたか？

白川：幼児ではなく、もう少し上でしたね。その事件のことを話していました。高所恐怖症に対して高所安心症というのが、子どものなかに見られるとテレビで解説者が言っていました。私たちの子ども時代って、あんまり小さい子が高層マンションに住んでいなかったです。1980年代にこんな研究がありました。4階以上の高層で育った子どもの遊び時間がそうでない子どもと比較してかなり短いという横浜の研究結果がありました。ところが、最近はやっぱり結構若いご家庭が高層マンションに住んでいらっしゃる。それで、遊び場もかなり制限されてきています。高所安心症っていうのは、どうしたらいいのかというと、幼少期に例えば滑り台とか、ブランコとかで高いところの恐怖を直接経験することが大切だと、その解説者がそういっていました。そういうこともあるんだと、思いました。それも、生活の中の直接体験が関わってきているから、だからそうなのかしらと思いました。とりとめの無いコメントでした。

一色：白川先生、ありがとうございます。白川先生の話と服部先生の話、お二人の素晴らしい先生方のお話を伺いまして、私の方から伺わせていただきたいのですが、今、白川先生が、乳児期の後の子ども期なしでそのままというのはやっぱりちょっと、保育士の人が虫やなんかを触れないとか、というようなお話がありましたよね。そうなってくると、これからの時代、また子

も期というのを復活させるということが、あってもいいのかと思ったのですが、その辺、お二人の先生はどう思いますか？

服部：はい、良いご提言ですね。皆さんは、私の孫と全く同じ世代と思います。孫は今20歳と22歳です。あの子たちと同居していて、育つのを見てきました。孫たちは、ほんの10年位の差ですが、でも今の子どもたちと自分は違うと言うのです。あの子たちと私とは違うと。皆さん、もしかしたら、携帯は中学頃から持ったと思います。それから、パソコンとかも中学の頃からかと思いますが、どうですか？ いつ頃から、携帯をお持ちになった？ 中学くらいから？

一色：手を挙げてみてください。

服部：偉そうに言います、今の子たちとは違うと。今の若い子とは、と。面白いと思います。ほんの数年の違いでもどこか違うのですね。母親が、事件が起こるつど危ないものですから中学生になって塾に行く時などに携帯を持たせていました。でも家にいる時は中学から高等学校までは、夜何時になったらリビングルームに置いていくようにと決められていました。ごく当たり前でした。でも今の中高生はメールとかを日に何百通とやっているでしょう。でもほんの数年前までは、そうでもなかったのです。逆に一色先生がおっしゃってくださったように、この大きな変化は昔々、例えば明治の話ではないのです。孫が言うようにごく数年前は今は少し違います。私の娘たちは40代の終わりあたりの年齢で、「ちびまる子ちゃん」とかの世代あたりで、かなり私たちに近い側に居ます。その子どもたち(孫)は、まだそれ程携帯が濃厚ではありませんでした。さっきどちらの先生もおっしゃったように、子ども期を全然知らないで大人になったら、私の言うような提言を受けても、自分の体験に子ども期を持っていなければ、どうしようもないということもあるかもしれません。でもそんなに昔のことではありません。皆さん、ご自分の体験も含んで、皆さんの世代の小学校期って多分、結構遊んだり、友達の家を行き来したりしていたと思います。私の孫たちがしていましたように。結構私の側にきて、料理なんかを覚えてたくて覚えてたくてしょうがない孫がいて、正月料理やらなにやらをすっかり覚えました。私は編み物が好きでよくしますが、そばに来て編み物を覚えた孫もいます。

だから、皆さんの中には、かつての子ども期の思い出として、何かあるかもしれません。白川先生もおっしゃいましたけれども、何か自分の手で編み出すもの、作り出すもの、そういう仕事を、何でもいいです、ちょっと思い出してごらんになるとあるのではないのでしょうか。今からでも何か料理の作り方を思い出す、あるいはとっても手先の器用な人ならば、いろんなものを作った思い出、例えば折り紙を折ったり切ったりしたことなど先生になった時、たちまち思い出されると思います。まだ、それほど遠くないのです。皆さんが全く伝えられないというのは、全く変わってしまっただけでそれが二代か三代続くといよいよなくなり、伝えられなくなります。だけどまだ夕日は沈みきっていません。さっき白川先生がおっしゃった遊びと学びと仕事大切です。とくに仕

事という言葉は、私も好きな言葉です。仕事とわざわざ名付けたのは、私も子どものころ結構仕事をしていたので、すごく懐かしいのです。そういう意味で、白川先生がおっしゃる子ども期を、もう一度、日が沈んでしまう前に、できることなら引きずりあげてでも、せめて小学校の間くらいまでは、かつてのような遊びと学びと仕事を皆さま方がもう一度呼び覚ましてほしい。幼稚園や保育園での親御さんの指導も大事です。親御さんは皆さんの世代よりちょっと上の方々になるかもしれませんが、今時の親は駄目ねなんてことは、考えないで指導してください。こういう時代を迎えていることを伝え、その時代にいかに賢く、人間が人間ならではの知恵を結集できるかを語ってください。子どもが子ども期にはできる限り子どもであり続ける大切さを伝えて頂きたい。思春期になった時に、子どもが自分の中の自我、自分が自分であるということを鮮やかに感じないといけないのです。子ども期に一番大事なことは感覚と感情と欲望です。精神科医として、勝手なことを言いますが、知識の記憶や思考とか物事を論理的に考えることも大切ですが、これはずっと後です。もちろんこれも大事です。人間ならではの大切な機能ですから。間接経験も大事と申し上げた通りです。ただ、原点、人間存在のベースというものは、知性じゃなくて感性の方だと私は思います。治療してしまてね、自分の知性や意志一つで、自分の今の心、たとえばうつ状態を治せるならば、医者はいりません。明日から元気になりますと言って知性や理性で自分を変え、はい、元気になりましたで、終わりますよ。それが、知性や理性の力だけでなぜ元気になれないか。それは、ものすごく奥が深い。奥の奥の感覚とか感情とか欲望あたりが、大きな鍵を握っているのです。これがフロイトの言う、イド(id)の世界です。無意識界ですが、これが実は静かな支配者なのです、人間の。この部分、無意識だからおかしいとお思いかもしれませんが、経験がそこに自然に入っていきます。だから、たくさんの感覚や感情を経験することです。たとえば痛みでもわーっと泣いたときその痛さを、お母さんが一緒にいて心から痛いよねと言ってもらう。すると、あ、自分のこの痛みを痛んでいいんだという肯定感を持ちます。反対に痛いはずがない、駄目じゃないの、早く立ち上がりなさい、って言われたら、自分の痛みの感覚が本当に素直にそのまま心の中に刻まれにくい。私は精神科医として、一番頼りにしているのは、子どもが自分は自分であってよいという自己肯定感です。これがコアになる力です。これを幼少期に培うことです。これを持っていれば、思春期に学校に行かないとか非行をなすとかあっても、それを通して自分を深く考えるチャンスになります。思春期の挫折は決してマイナスのイメージでは、無いのです。むしろ良かったね、良い時に来たね、それを通してあなた、きっと自分に気づくことがあるよと伝えます。ぜひ、子ども期を、もう一度復活してください。

白川：消滅なんかしていませんよと、言ってください。

服部：ぜひ言ってください。

白川：私の子ども期はこんなでしたよと、ぜひ。

服部：一生懸命メモを取っている方、いらしゃったじゃありませんか。

一色：一生懸命聞いてくれましたか？ 話はどうでした？ お二人の先生の話は？ どうですか？ わからなかった？ あら、全くしーんとなっちゃいましたね。あ、拳がった、どうぞ。

学生 A：先生のお話を聞いて、私たちは多分、子ども期が完全に消滅してはいない時代だったのですけれども、私の個人的な経験として、すごい豊かな子ども期だったとは言えません。子ども期を送りながら、自分たちは半分大人の世界をのぞいているから、子どもじゃないという気持ちを持ちながらも、親とか周りの先生は、すごい子ども期を期待していたので、大人に向けては子ども期、子どもをしている自分を見せながら気持ちの中では子どもじゃない自分と共に生きてきたのです。そう考えると自分たちは、一体どうやって、どういう子ども期を歩んできたのかなと、疑問に思いました。子どもでも、子どもじゃなくもないという感じ。

服部：それがね、私がいうアンファンテリブルです。外から見たら子どもなのに、心の中では大人。あなたはきっと、大人っぽく世界をもう感じ始めていて、だから大人は皆、子どもよと言っているけれど、ちゃんと中が成熟している。その内と外の落差があって、それが思春期の面白さです。見事な思春期。素敵すてき。

白川：素敵です。

服部：子どもなのに、子どもじゃないと思いませんでしたか？ 私の中には大人顔負けの何かがあるぞと思った。それが思春期です。健在ですよ。良かった。

一色：最後に良い質問を出してくれてありがとうございました。では、二部は地域の方々とのディスカッションに移ります。

<第二部>

一色：それでは第二部ということで、お二人の先生の話聞いて、ここからはディスカッションということで、やっていきたいと思います。大体 30 分から 35 分くらいということでお願いしたいと思います。それでは、お二人の服部先生と白川先生から今日のテーマである子どもの発達と家族の社会、家族や社会の役割というような、これについて質問とか、コメントとかそれから、こんな事とかはどうだろうかとか、何でも手を挙げていただければと思います。よろしくお願いします。

一般 A:大阪から来ました。高校の教師をしておりまして、もう退職しまして今62歳なのですが、今日のお話、子ども期が消滅したという話。非常に興味深く聞かせていただきました。でもちょっと思ったのは、一律に子ども期が消滅したのかなと、すごくまだら模様のような。消滅したような子どももいるし、それから、さっきの非常に豊かな子ども期を持っている。私なんかは、すごい子ども期が無かった人間かなと思っているのですが。本当に家族がガラッと変わり、僕らの頃から2人兄弟の家族、子どもがずっと増えていました。僕らの親は、6人7人でした。僕の場合、三世代同居の中で本当に昔風の家族、明治時代生まれのおばあさんおじいさんがおった家族でした。ところが、僕なんかの同世代の人で全くの核家族で、核家族の走りみたいな中で育った子どもいますし、そんなことを考えてみますと、本当に子ども期の消滅というのもすごくまだらがあるのと違うのかと。現在だと、どんどんそういうそれが、まだら模様が、どんどんどんどん一色になってきているのかなと、そういう感じで。だから僕にしてみれば、どのように言ったらいいですかね、非常にいびつというか、その三世代の中で育ったのですけども、子ども期が無い。テレビやらなんやらばっかり見ていて、知識的には大人。教育テレビを見たら一番思うのですけれども、昔は本当に教育ばっかりのバリバリの教育テレビをやっていて、今のNHKの教育テレビは、わー、こんな子どもみたいなことをやっていていいのかなと思うような教育テレビなんですけれども。だから言いたいのは、本当にまだらに進んできたんだと、そういう中で、そのことも、ものすごく混乱を起こしているのと違うのかなと、子ども期が消滅したのもだけど、まだらに消滅してきたんだと、そういう気持ちで感想です。わかっていただけましたでしょうか。そのことも、何かきしみを生んでいる、二重にきしみを生んでいるのと違うかという気持ちがしました。

服部:もちろん個人差が大きいですしね、おっしゃいますように、まだらというのはたしかにあるでしょう。人によって違う経験がみんなそれぞれありますので。ただ、大きくメディアということから考えた場合、同じメディアでも教育テレビの内容によっては、学習的なものから遊び的なものまで、いろいろあるかもしれません。ですからメディアによる情報伝達の変化による子ども期消滅と大きくざっくりと言っているだけで、しかもそれも全く消滅したわけではなく、一つの兆し傾向だと思うのです。ただ一日の過ごし方を眺めると一番よく言われるのは遊びの変容です。遊び時間、特に外遊び、そして友達とともにする遊び、一人遊びではなく組んず解れつする直接体験の遊びが激減し、ネット依存が子ども期に激増しているのも確かです。藤本浩之輔という、遊びの大家がおられて、もう十何年前に亡くなられましたけれども、彼が毎年毎年同じ五年生の子どもたちを個別に実に緻密に遊び時間を計っておられました。彼が亡くなる直前、十何年前ですが外遊びが、9分か何かになっていました。その数年前はそれこそ、一時間以上の外遊び時間がです。だから今、外遊びというようなことがもう無くなってきたことは確かでしょう。そして、そういう大きな流れがありますが、子ども期は外遊びが無いから消滅しているかというそう単純なものではないと思います。ただ、子どもが子どもであっていい。ゆつくりと脳細胞にせよ、体の各細胞にせよ、ちょっとずつ身長が伸び体重が伸び臓器もだんだん成熟していくプロ

セスがあって、そのプロセスにあわせて、さまざまな刺激を子どもたちが体得していく。そのように全体として成熟をしていく時に、いきなり早い時期に視聴覚を通した情報が、0歳や、1、2歳から入ってくるということ自体が全体の成長バランスからみて不自然です。0歳から6歳頃までは先ほども言いましたが、何とか守られうる聖域にできますが、小学生あたりからは、自分が自ら好きなものをどんどんゲームにせよ、何にせよ、人との交流にせよできる時代になっていきますと、まだ未熟な判断力も思考力も未熟な時にたとえば性の情報が入ってきたり、大人のどぎつい情報が入る。そしてそういうものが、子どもの育っていくその順番にそって、段階を追いながら全体として育つことに不協和音を起こし、子どもであり続けられなくなるんじゃないかと思っています。メディアを中心にして考えると、やはり子ども期が危ぶまれるようになったというのは、やはり私がどうしても言いたいことでありました。それが私が一番考えたことです。白川先生、いかがですか？

白川：一般に核家族化の進み方は、日本全国で地域によって違います。やはり、大都市に核家族の割合が高いです。とにかく複雑です。そう一概に年代を追って一律に変わって行くのでは無いと思います。そして、遊びの問題でも子どもって本来遊びたがるものですから、例えば階段があれば、「だるまさんが転んだ」と遊び始めます。マンションの片隅にちょっとしたスペースがあるのですが、この間も驚いたんですが、小学校の何年生でしょうか、4、5年生くらいの女の子が仕切って、3、4人の男の子とサッカーみたいなのを始めちゃって、え、こんなところでも子どもは遊ぶんだと思いました。ですから遊べなくなっているといっても、そう単純なものではないなと思います。ただ、今日のポストマンのこの本は、警鐘を鳴らしたというか、こういう方向に行っていますよと示しています。それで、本当に中世は子ども期が無かった。そして、子どもが18世紀に発見されて、子どもは大人と違うんだと、大人になるためにあれこれとしなければならなかったことがあった。その子ども期がやはりメディアの発達でかなり変わってきているなど、それは感じます。世界あるいは日本のあちこちで大惨事があっても、それをテレビの画面で見れるわけですから。私たちは、それを見れなかった世代です。ですから、数量的に年代を追ってこうこうというのは違うと思います。一方で、やはり人間は人間らしく生きたいというのがありますから、子どもは子どもなりに遊びたいというのがあるみたいです。子どもの中で子どもであり続けたいというのがあるのではないのでしょうか、さっきの学生さんもそうでしたけれども。

一般B：服部先生のお話の中で、パラサイト感というような、カタカナになると非常に新しい感じがするのですが、パラサイト感というのはどういうものですか？

服部：これは、ほんの数年前に大流行した言葉です。パラサイト・シングルという山田昌弘さんの本が大評判になりました。あまり長く続かなかったのですが、1990年代から2000年頃にかけて、パラサイトシングルという現象が話題になりました。パラサイトとは寄生虫という意味ですから、

親に寄生をして暮らす若い男女のことです。独身の男女の未婚化が進んで、親の元にて家賃も何も入れないで、ほとんどの収入を自分の趣味やらより良いものカッコいいものを購入することに使う。結婚は上昇志向ですから、よほど上向きに良くならないと結婚しないという人たちが多いという指摘でした。今はもう、形を潜めてきました。多分、パラサイトの宿主の方、つまり親側が、老いてすっかり疲弊して、逆に介護を必要とするようになり、パラサイト状態から逃げ出したい、もうとんでもないということになる例が増えてきたのでしょう。でもパラサイト化というのは、少なくとも今もやはりあると思います。つまり、親元にて、いつまでも自立しない、そういうタイプの人たちというのが。未自立な子どもたちとか、青年たち、大人たちとか、ある一定の引きこもりこれは必ずしもパラサイトとは言われませんが、社会的引きこもりが今70万人80万人と言われているので、どうしてもそれは、親たちが背負う形が多いです。引きこもりをしている人たちが良い悪いではなくて、これはやはり社会化の問題ですから、そういう意味で大人になりきれない「子ども化した大人」の一つのタイプでしょう。社会の一員になるための根底に必要な力のようなものの育成が非常に弱くなっているなという感じを受けます。

私は、臨床医で、診察を受けに来る方がみんな何らかの問題をもって来られるものですから、社会全体がどうかと言われますと必ずしも正しい答えにならないかもしれません。ただ少なくとも内的な、こう内面がなんとなく脆弱化しているように思います。自分というものの捉え方が弱い。昔私が診た思春期の若者たちの方が、もっと悩みを悩んでいました。今は、良い悪いは別にして高等教育を受けた人も多いのですが、何をどうどこから手を付けたらよいかわからず、呆然として、自分というものをどう見たらいいんですかというような質問から始まったりします。かつての子どもたちは自分のことを見て見て見尽くすほど苦しんでやってきていましたから、そういう意味での違いというのは、臨床医として相当感じております。そういう意味でパラサイト化というのも親という強いものに寄生虫化してくっついて、自分自身の自立を遅らせるというタイプの大人、未熟な大人と思え、現在増えているのではないのでしょうか。

一般 B：漱石の小説の中にも、高等遊民なんていう言葉が出てきます。そういう高等遊民というような人もパラサイトの一族なんじゃないかなという気もするのですが。

服部：確かにあの時代の漱石の主人公、たとえば『こころ』の先生は、どういう職業の先生か定かに書かれておらず、日々の生活費はどこから出ているのか分からないような人たちが書かれており、興味深いです。おそらく親や家系のもつ地位、経済力の中で生きる、広い意味でのパラサイト的な人物が当時は存在していたと思いますが、内面の精神性の豊かさがあって、未熟ではなかった気がします。だから、高等遊民という言葉が生まれているのは、半分は尊敬というかうらやましさも込めているのでしょうね。教養とか芸術性とか哲学性の強い人たちには内面の成熟があります。今の子どもたちは、内面の貧弱さ弱さ、外側よりも内面の弱さがあり、感覚的にとても感じてしまいます。いい子が、優しくていい子が多くて、素直でまっすぐなのですが、何か自分と

いうもの、自我っていうものがとても脆弱で育っていない。未熟と私がいつも言う言葉に一番近いかもしれません。

一般 B：私はパラサイトの者が増えてくることは、世の中が豊かになっている証拠であって、反対に考えると、多分、姥捨ての考え方につながるのではないか。老人になって生活力の無いものは、山に捨てざるを得ないというような。そういう、姥捨ての時代から考えるとパラサイトというのは、親が子どもや孫をしっかり養っている、食べさせていけるのは豊かな社会なのではないでしょうか。

服部：そういうことだと思います。あの頃の世相を山田昌弘さんの本はよく解説しておられ売れました。それは、まさにおっしゃるように、宿主、パラサイトさせている宿主がお金持ちで、今のちょうど60代、あなたの年代よりもうちょっと上でしょうか、団塊の世代の上あたりが、結構お金を持っているといわれました。老人の貧困が今、言われていますが、ある一定の人たちが、とてもリッチな時代に、ほんの短い時間でしたが、本当に私の周りにもパラサイトと思うケースが多かった時代がありました。ですが今、むしろお金よりも疲弊して介護が必要な親も増えてきて、パラサイトが逃げ出しています。親の面倒を見たくない、お金をもらっても見たくない、そして、親元に居たくないという人も増えていると思います。そして形の上でパラサイトが減ったから自立したかということ、内面は依然として弱い人が多いのではないかと、これは臨床医の直感ですけれども思います。やはり、子ども期をたっぷり満喫して、そして思春期になってある種の衝撃、初めて大人になるという自覚の中で危機ではあっても成長する。これが大切なのです。昔は子ども期は子ども期としてあり、あなたは子どもだからと言われて、早く大人になりたい思いが、子どもにありました。そうしないと自由が無いし、大人に抑え込まれるばかりで、お父さんやお母さんにもよく叱られ、学校に行っても校則がきつくってというのが思春期でした。ところが今はだんだん緩やかになり好きなようにしたらというように親にも言われ、それが幸福なようですが、むしろかつての思春期を診てきた者だとすると、そういう中で、自分が大人になって何ができるだろうと、断崖絶壁に立つような思いで、自分に向き合うというチャンスを失っている。昔は思春期にそういうチャンスを持っていたので、その緊迫感が少なくなっている現在、臨床医としては、これはマイナスの要因なんです。夢の中で崖っぷちで一人で立つ夢を毎晩見るんですという子がかつては結構いました。それほど自分を見つめるという作業があった。一人前の大人にならねばならないというテーマが、かつての子どもにはあったからこそ、自分の不全感に悩み、ちゃんと学校に行けない自分、人と出会えない自分を重大なマイナスと思った子どもたち、私の好きな思春期の姿ですが、そこを通過こそ、自分というものを固めることができるのです。そういう意味で、今は糠に釘、暖簾に腕押しじゃないですが、優しいいい子が多いのですが、緊張感が少なく、本当にテーマに向き合う強さ、そういうものが育っていないという気がします。

それは自我、自分が自分であるという根っこの体験が少ない。知識やらが早い時期から入って

いますし、人とのつながりもなんとなくできていると思っていますが本当の経験が乏しいのです。人とつながる、例えば性なんて、最も複雑な作業です。人と人が向き合って性を共有していくのは。全く性の経験を持たない、あるいは性の欲動の少ない思春期も多いです。“いい歳の”と言いたい10代の男の子と女の子が同じ場所に居ても、何も性的な出来事が起こらないこともあります。かつて児童相談所では、性的な何かが起こると「不純異性交遊」という名前で診断をつけましたが、問題は問題ですが何が不純かといつも思っていました。十代とはそういうことが化学反応としておこるものだからです。今十代やまた二十代の童貞・処女が増えています。奇妙なことです。動物界を見てください。つがいになりたいと、死ぬような思いで相手を探しに行く。性は再生産で生きものの第一級本能です。人間の思春期も、性は一番大きなテーマの一つです。でも幼い頃からの人間と人間の触れ合いが少なくなり、性の欲動そのものが沸いてこない。一人だけのほうがいい、人と一緒に暮らすとか、結婚とかをするのがめんどくさいというような人が、確かに増えています。これは、生物体としての発達過程から眺めると、私はとても不健康という気がしてならない。パラサイトもそうです。寄生虫化したら、楽ですから、寄生虫になってしまう。親がお金持ちなので、散々遊びのほうに自分の収入が使え、デパートの上位の消費者は大金持ちと若い未婚の男女と言われた時代があったんです。その時がパラサイトシングルの時代といわれたのです。でも今のパラサイトは親の豊かさというより子どもの未自立という側面が強いと思います。

一般 C：服部先生、保育士養成の学校に行かれて、送り出す側として、私どものような現場に対して願うこととか、夢物語など、かつて思春期を診られていた先生が、保育士の養成側に移られて、例えば保育士養成は、こういうシステムだったらよかったのになとか、現場に対してこういうことを送り出す側として現実に願うことや夢があったのかなと思いました。私は、30年前にこの仕事について、白川先生に教えてもらったり、フレーベルを教えてもらったりしたのですが、だんだんおおらかさというか、私の感覚では、現場ではなくなってきたというか、マニュアルというカリスママネジメントだとか評価だとかクレームだとか、学生自身も昔のような覚悟もなく現場にきているような感じで、なかなか難しい。それこそ遊びを十分に、子ども時代を生きてきたような子が保育士の道に来ないとも言えるので、なかなかどういう風にしていけばいいのか、現場としても実際ますます頭が痛くなるというかという状況なんですけれども、何かアドバイスをいただければ。

服部：なんとお答えしたらよいでしょうか。頌栄にいたのは二年間でしたが、私は、一番好きなキーワードの「生きる力の火種」と人間発達論をしつこいほど話して学生を送り出しました。乳幼児期の3つの段階、乳児期と幼児前期と前期後期のそれぞれの発達を通して「生きる力の火種」を灯すこと、これを学生たちに教えたかった。そして思春期に悩んだ時私のような精神科医の所へ送ってほしい。私は火種を大きくする作業に入りますと。もし火種が灯っていないと、臨床医としてはとてもやりにくいというか難しい。それと私の授業としては、それが一番伝えたかった

ことだろうと思います。やはり遊びの大切さです。白川先生は遊びは子どもはできるとおっしゃるし、遊びというのは人間の一番の欲望の根源の一つだろうと思いますが、やはり子どものときに遊んでいない子は、遊びが非常に狭い。遊びの楽しみを本当に知らないと、狭い範囲での遊びにしかならない。クリエイティブで人と共に、というような豊かな遊びを、やはり幼少期にしているかどうかの違いが大人になって出ます。遊びの大切さ、とくにそこから生まれる自発性、もっとも必要です。内側から湧いてくる豊かなエネルギーをもつ遊び、それが一番大事という気持ちで学生を送り出しています。どうぞ保育士の先輩として、後輩を育ててください。答えになっているかどうかわかりませんが、送り出す側としてはそうした信念でありました。白川先生どうぞ。

白川：はい。私はむしろ逆に、今、保育の現場で何が起きているか、保育士さんが変わって来ているのかなとか、そんなことを逆に知りたいです。多分、いい方向には向かっていないんじゃないかな、いろいろな問題もあるかと思うのですけれども。私も大学の教員としても長かったのですが、評価々で大学の教員も文科省からだけでなく学生からも評価されて、何かもう大変なのですが。多分保育所の現場でもいろいろとそういうことが起きているのではないのでしょうか。それから、もちろん保育者を養成する立場もありますが、養成されて保育士になって、そこから専門家として成長しなくてはいけないのですが、それが多分できない状況が心配です。実践を通して専門家になっていく、子どもと関わって専門家になっていく、それが、昔はまだ余裕をもってできた。親と保育士と私も入って、夕方遅くまで研究会をやったりしていました。東京で大学院生時代にやっていたのですけれども、すごかったです。一人ひとりの子どもについて、あの子の発達について親と保育士と関係の無い私が入って、そういう研究会がやれていました。以前、一つの園にずっと入っていましたけれども、久々に園に行くと一時預かりの子が空間を全部占領している。見慣れない子が、一時預かりで来ている。それで、補助金が出るから、やっぱりしなくちゃいけないとか。いろいろ問題が起きていると思うのですが、どうしたらいいのですね。

服部：現場は本当にどうなのでしょうねと私も思います。

服部：いろんな問題がね。

一色：現場の先生もいらっしゃるので、春名先生いかがでしょうか。

春名：本山北町あすのこども園の春名と言います。今日はありがとうございました。先ほどの話でいうと、保育施設は安心・安全を売り物にしてしまって、保護者もそれを求めて、本来すべき教育や保育というのが、セールスポイントの一つのように成り下がってしまっているのかなというのは感じます。ですが、私たちの園では、先生がおっしゃられていた子ども期が消滅してし

まうことについて、乳幼児についてですが、内はたっぷり遊んで、遊んで遊んで、そして仕事もして、先生がおっしゃられるような火種を幼少期にしっかりとあげたいと思って、保育に取り組んでいます。ただ消滅した時期を過ごしてきた保護者というのが、やはり多いのかなと思いますし、園でしていることについて、どのようにアナウンスしていくべきか、そして、どのようにしてリードし支援していくべきか、保護者支援というのが、保護者が楽をするためというか、仕事を支援するのではなくて、保護者の子育ての力をつけられるような支援をしていきたいと思って、それについて何かないのかとお伺いしたいと思っています。

服部：保護者の要望が、安全で楽でという方向にどうしても行くと思います。昔から女性の社会参画というのを進めようと言われていました。でも昔は「両立」という言葉が、テーマむしろ課題としてありました。子育てと仕事を両立させたい、どっちも大事だからこそ苦しい。ところが今は「両立」ということばがあまり言われず、待機しているので早く入れてほしい、入れてもらったら子どもを預けて仕事にいく。どうかすれば、危険さえなければ、安全でましてや、親に代わっていろんなことをしてもらえたら、よっぽどそれがいいという風潮もあります。昔は、子どもの側にいない自分というのを親は常に意識しながら、不安全感も含めて、親として大丈夫だろうか、身をもむようにして考え、何とか両立をさせたいと思った。私はそのことはとても尊いことだと思います。私もそうでした。仕事をしながら、常に子どもに十分なことをなしているだろうか、と悩みました。この悩むことが豊かさだったと私は思うのです。ところが今の親は、「両立」という言葉をあまり使わなくなってきたでしょ？ 預ける所さえ見つければ、荷物を預けるように預けます。この間もどこか傷している子がいて、病院で泣いていました。そこにお母さんがきてまず先生を責める。子どもが痛いよと言えば何よりも先にお母さんが駆けよって抱きしめるべきです。それをしないで、まず保育士さんがちゃんとしてくれるはずだったのにと責める。そのあたりの保護者への教育というのでしょうか、子ども観や人間観をどれだけ充実させるか。大きな潮流がただ待機児童を減らすために保育所を作るという方向ばかりに行っている中でするのはとても難しいです。でも先生の園では、いろいろな付加的な能力などよりも、本当に遊びを大切にしている力の火種を培うことを信念としていとおっしゃってくださる。私はそういう園が、一つ二つと増えてほしい。親が子どもを育てることは、労力もかかり大変だけれど親自身の成長になるんだという聡明さをどれだけ親の中に植えつけるかということにかかるので、どんな小さな力でもどうぞ常に続けてください。そうした園が増えることで、仕事もしたい、親としてもちゃんとやりたい、だから苦しい、ジレンマを抱えて生きる。そこにこそ、初めて人間らしい成長があると私は言いたくてたまらないです。

白川：いろんな点で、全く同感です。確かに、両立する者の悩み、親としての悩み。すごくいい話です。

服部：あまり聞かなくなりましたでしょ？ 両立。両立をさせることがテーマですということ。女性の社会参加、参加と言うばかりで。女性を100%参加させよう等と。その背景にあるもの、両立の苦しみをもって社会参加こそ大切というのなら、私はよくわかるんです。

白川：本当、聞かなくなりましたね。ですからやや極端な本ですが、『安心・安全な保育園が子どもを駄目にする』という本を書かれている人もいます。保育園の園長さんで、関東の方です。確かに、子どもを預けて自分が楽になりたいしかないですね。保育園探して何がポイントかという、プールがある所がいいと言うのですよ。子どもがプールで遊んで、そしたら、家に帰ったらすぐに寝てくれるからいいと。子どもを抱えながら、何人かがお茶を飲みに来ていて、そういう会話をしていました。探す時は、プールのある所にしなさいと。両立しようとする者の苦闘がみうけられません。

一般 D：今日はどんなお話かなと、楽しみに参加しました。いつもシンポジウムのご案内をいただきありがとうございます。私は、学生の時にニホンザルの母子間関係をやっていました。子育てが忙しくなって4人育てています。私ながらにできることと思い2、3歳児のNPOと畑をやってきました。ようやく4人目が高校3年になったので、社会人の大学生で、もう一回ニホンザルのことをまとめているのですが、今日お話を伺って、人だけが子ども期が長いというのが、チンパンジーやゴリラと比べて特徴だと言われてきていたのですが、それも無くなってきているのかなというのが感想と、やはり子育ては思考や論理ではなくて、感情とか自分がどう育てられたかを手本にしてしか育てるしかないはずと感じてきたので、そういう意味で自分が親になって、そこで思春期の葛藤が今は少なくなってきてしまっているかもしれないけれども、そこで初めて自分が大人になるために、鍛えられているというか、試されているというか、やはり、自分で育てる中で手探りで、自分の幼児期とか子ども期とかをもう一度、手繰り寄せて育てていくことが、大事なんだなというのを感じました。きっと今日、若い学生さんたちも話を聞かれて、すぐには分からないかもしれないけれども、きっと自分が親になった時に、やっぱり子育てって奥が深くてすごく大事で、今の社会では子育てが評価されていないと思うけれども、やはり人間が人間を育てることの大切さというのを、自分が親になって、どう子どもと向き合うかを自分で育ててみて、自分の育った時代や、育ち方やそういうものをもう一度感じながら子育てをしていくことによって大人になれるのと違うのかなと思って、すごく今日のお話は、学生さんも将来親になった時に、もう一度自分の育ちというものを手繰り寄せて、なおかつ自分なりに子育て、子どもと自分がどう向き合って、どう育てていったらいいかというのを遊びの大切さとか、そういうものを幼児期の大切さというものを、やはり感じられるような体験というか、先生のお話だったなと思いました。

服部：ありがとうございました。何も付け加えることはありません。その通りと同感しています。

4人のお子さんを育てられた方のお言葉。子どもを育てるということは実は親自身が最良の人生を手に入れることなのです。自分自身が育つ。あなたがおっしゃられる通りだと思い、何も付け加えることはありません。動物界で子ども期が長いというのは、「ネオテニー」という言葉だと思います。確か「幼児化」の意味ですね。これがここまで人間を進化させたのでしょう。動物は簡単に大人になってしまいます。特に発情期と親子分離は同時期に訪れ、思春期なんて持っていません。しかし人間の脳は20歳ぐらいまでしぶとく発達し続けると言われているのです。人間が地球上でトップの座を占められたのは、幼児期が長かったからだという学説を、「ネオテニー」というと思うのですが、幼児期がだんだん短くなれば、逆に言うのだんだん人間としての豊かさが無くなることだと思います。この長い幼児期があるから、万物の霊長になったのかなと、今お話を伺いながら思いました。そして、おっしゃったことが全部素敵です。

一般D：だから、社会の中で、幼児教育の大切さとか、親が子どもを育てることの大切さとか、奥深さとか、本当に今保育士の給料が問題になっていますが、もっともっと保育が社会の中で評価されるべきだと、私は保育士では無いのですが、もっと保育の地位が高くなって、本当に大事なんだということをみんながわかってくれたらと。お母さんなんだから当たり前でしょ、という問題じゃなくて、やはり人が人を育てるということは、すごく大事なんだと、大切なんだと保育士になりたい方が思ってくれただしたら、自信をもって言ってくれただしたらいいかなと思いました。

一色：ありがとうございます。時間が無くなってきましたが、ほかの方どうぞ。

一般E：高齢で現場から離れている者で申し訳ございません。教育現場とは直接の話ではありませんが、自然環境の中で子どもたちが育つような場所づくりということで、今も外で活動させていただいております。服部先生がおっしゃった二番目の変化する社会や家族の中で子どもの発達をどうするかという課題の中で、私の関心があるのは、現代の変化する社会の中で一番根柢的な課題はITの時代であるということです。直接体験とは全く反対の事柄で、そのITの中で、いわゆる子ども期というのは、6、7歳～高校生までと、まさにITが爆発的にスマホを通じて浸透している時代だと思います。そういう中で、直接体験、もっと詰めていくと直接経験ができるような仕方がまだ幼児期6歳位までに対しては、まだ残されていると思うのですが、現在、小学校中学年から高校生まではITの時代のだ真ん中であって、全く翻弄されているように私の目から感じられるのですが、その中で直接体験を豊かにさせるというのは、どういう可能性があるでしょうか。非常に悲観的に思うのですが、先生のご指示をいただきたいと思います。

服部：はい。大変根源的な問題です。現在の潮流がIT中心で、スマホの依存率は大変高い。一日の何時間も、ゲーム、スマホをする。またメールは何百通。それを少なくするという発想は、

私は難しいかなと思います。ある意味では、麻薬のようなもので、面白いですし、どこまでもめり込むかもしれない。唯一言えることは、先生も関わっておられるような何か他の体験の魅力をいかに仕掛けるかということです。スマホ依存を減らすのではなくて、そうで無いものを増やす。そしてITの侵入の度合いを少なくする。マンションの階段でも遊ぶのか面白い子が一人でもいて遊びが広がる。仕掛け人がいれば、なんとなく原っぱがなくても遊ぶことの楽しさを味わえる。あるいは、それぞれの子が編み物をするのが楽しいとか、料理が面白いとかをみつける。あなたが用意されたような場所づくりもステキです。それと誰か仕掛け人が大人でもいいです、子どもでもいいです、いたら良いですね。要するに、ITを減らすのではなく、そうではないアクティビティの魅力をどれだけ導入するか。そうすると結果として一日24時間の内のITの侵入度が少なくなり、バランスが良くなる。もう、それしかないと思います。その仕掛け人ができるのは、プレイリーダーという遊び上手な大人たちや思春期・青年期の年かさの子たち、そして子どもの時に散々遊んで遊びについてある種のオーソリティみたいなところのある子どもたち。子どもの中でも遊びが上手な子がいますから、その子を上手におだてて、みんなを引っ張っていってもらう。それによって、ITの侵入度が、相対的に減っていくしか方法はないかなと思います。あなたもぜひ環境づくりも含めて、子どもたちをたらし込んでください。こんな面白いことがあるよと。何かそんな動きが大人側からも出てきたらいいかなと思います。白川先生いかがでしょうか。

白川:私も遊びを指導ではなくて仕掛けるという、仕掛け人が誰かいるというのは重要かなと思っています。IT環境に対して自然の中で直接体験できるような仕掛けが必要だと衣思います。

服部:子どもも仕掛けられたら遊びます。味を味わせると遊びますから。仕掛けをできる大人たち、ヤングアダルトあるいはプレイリーダーみたいな人、子どもの中でも虫博士のようなみんなを上手にもって行ける人とか、編み物上手な子とか。何か仕掛けを上手に持っていくことが必要かと。

白川:それだけではなくて、もちろん場所も必要ですね。児童公園で遊べなかったり、遊ぶ環境、年齢でも違います。私は大学の上のマンションの広い公園でプレイグループをやっていたのですが、児童文化研究会が指導している小学生はボールを使ってダイナミックに遊びたい、小さい子は砂場でじっくり遊びたい。そこで二つのグループで話あって遊びスペースの区切りをしました。そうしないといけない。やはり、マンションの階段で遊ぶだけでは駄目ですね。仕掛け人ももちろん必要です。絶対環境は必要です。

一色:それでは、時間がそろそろ終わりになりましたので、ここらあたりでと思います。今ITのことが最後に出ましたが、実は最近、文部科学省がこれからの授業はWEBを用いていくという、ITですが、そういう方向に動いています。そういう中で、どんな風にできるのだろう

かということを、皆さん方と一緒に考えてしたいと思いますので、これからもよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。